

ラグビー W杯2019

大会アンバサダー(元日本代表)

増保輝則さんに聞く

アジアで初のラグビーW杯2019が9月から日本で開催されます。大会アンバサダーで、元日本代表の増保輝則さんは板橋支部の組合員。お話を聞きまし



「W杯を契機にラグビーのすばらしさを広げたい」と話す増保さん

大会の広報活動をされているとお聞きしました。どのような事をされているのですか。

増保さん 私はラグビーW杯2019のアンバサダー(大使)をやっています。試合は全国12の会場で行なわれ、会

場となる自治体を訪れ普及活動と広報活動の支援をしたり、地元商工会議所の方たちとW杯への協力を話し合っています。具体的に言いますと、会場になる地域でのイベントへの協力、その地域のラグビー大会のプレゼンタ

「情熱」「結束」「規律」「尊重」を守り抜いて、具体的なプレーに落とし込んでいこう

増保さん ラグビーは危険なスポーツですから、親御さんから敬遠されがちです。激しい身体接

見てもらいたい迫力
ベスト8のチャンスある

増保さん W杯組織委員会の中でも危機感があります。テストマッチが地上波で放映されたりして、W杯の認知度は徐々に上がってきています。また、東京にいるとオリンピックへの関心の方が高いのを感じますが、開催地となる地方はW杯への期待は大きいです。たとえば九州地区、特に福岡などはラグビーの本場、イギリスからのインバウンド(訪日外国人旅行)を増やしたいと取り組んでいるところもあります。

増保さん W杯組織委員会の中でも危機感があります。テストマッチが地上波で放映されたりして、W杯の認知度は徐々に上がってきています。また、東京にいるとオリンピックへの関心の方が高いのを感じますが、開催地となる地方はW杯への期待は大きいです。たとえば九州地区、特に福岡などはラグビーの本場、イギリスからのインバウンド(訪日外国人旅行)を増やしたいと取り組んでいるところもあります。

増保輝則さん プロフィール

1972年東京生まれ。城北中学時代にラグビーを始め、城北高校、早稲田大学、神戸製鋼でスタブプレーヤーとして活躍。日本代表として3度W杯に出場。現役引退後、(株)六大工業へ。現在、取締役社長。ラグビーW杯のアンバサダー、神戸製鋼チームアドバイザーなどを務める。

触れないラグビーの普及や体育への採用を学校に働きかけたりにしています。Jリーグなどに学びながら、日本ラグビーフットボール協会は、W杯後もトップリーグのチームがジュニア、ユースなどを作って行く方向も模索しています。

増保さん 神戸製鋼にいる時から、従兄(現会長)と一緒にやろうと言われていました。六大工業は解体がメインで、杭の引き抜き、アスベスト除去、地盤改良工事など建物の解体に伴うすべての仕事を請け負っています。ここ数年、景気は良かったですが、今年は元請(セネコン、デベロッパ)さんも慎重姿勢が感じられます。



(株)六大工業の社屋を背景に立つ増保さん

自治体と関係築く
府中国立はパートナーズ



私たちが応援しています

府中市は、ラグビーのまち。トップリーグのサントリーサンゴリアス、東芝ブレイブルパスが活動拠点を置き、W杯では強豪、イングランドとフランスがキャンプ地になることになっています。府中市などで組織する「ラグビーの

「ラグビーは、個人の能力、人間の限界に挑戦するようなところが魅力。私たちがやっていた約20年前より、今は確実に進化しています。日本代表がベスト8に入れば、チームになるでしょう。野球やサッカーのようにプロが夢のような報酬を得るようになることが普及のポイントになるのではないのでしょうか」と話してくれました。



「地元でも見せてもらいたい」と鶴岡さん

人生変えたラグビー
多摩西部の鶴岡誠一さん

「ラグビーは私の人生を変えました」と話す多摩西部支部の鶴岡誠一さん。1947年(昭和22年)、東京都立川市生まれで、中学まではラグビーの経験は全くありませんでした。1963年に地元の

にもなるのでパートナーに手を上げました。『ラグビーのまち府中』のサイトを見てもらうと、パートナーズのトップに支部の紹介が出てきます」と話すのは主任書記の世並佳史さん。世並さんは高校時代に名門、国学院久我山ラグビー部に所属し、ウイングで活躍、3年時には全国大会ベスト8の経験を持っています。

「今日、私が建設業で請負を続けていく『根性』を築き上げたのは、間違いなくラグビー。ラグビーは一人が基本、自分が抜かれたら即、失点につながる。責任感が養われます。170cmに満たない小柄ながらもフロンカーをつとめ、大きい相手に身体ごとぶつかっていった鶴岡さん。

も中途半端だったけれど、勉強の成績もクーンとよくなった。ラグビーは高校3年間で卒業後、NECの社会人チームに所属してやりました。『今日、私が建設業で請負を続けていく『根性』を築き上げたのは、間違いなくラグビー。ラグビーは一人が基本、自分が抜かれたら即、失点につながる。責任感が養われます。170cmに満たない小柄ながらもフロンカーをつとめ、大きい相手に身体ごとぶつかっていった鶴岡さん。